（鳥羽市温泉振興会メールマガジン）

「海女の愛ちゃん鳥羽の温泉宿にダイブ！」

「海女の愛ちゃんが湯く！」　水無月の巻（下）

こんにちは！海女の愛ちゃんです。
水無月の巻（下）は、4つのお知らせです。

◆お知らせ1

海藻温泉マークが誕生しました。
卯月の巻で海藻採集の様子を報告しましたが、その後、野田三千代さんに海藻押し葉による手法で温泉マークを制作いただきました。

湯気は伊勢神宮にお供えされるアラメで、海女漁で獲るアワビ、サザエの餌になる大切なものです。湯舟は紅藻フダラクです。余り馴染みのないものですが色がきれいです。

私は、鳥羽の誇りである海藻をモチーフに温泉マークを作って頂き嬉しく思います。温泉の湯気に見立てたアラメの幼体の躍動感が、豊かな海を表現されてると思います。

いつまでも鳥羽の海を守っていきたい気持ちが強くなりました。

○海藻温泉マークについて中村鳥羽市長と立教大学の安島名誉教授から感想を頂きました。

【中村欣一郎　鳥羽市長】

科学技術が発達して、もう新しいものは生み出されないという。
これから生み出されるとしたら、何かと何かを絡めた「新しい組み合わせ」なのだそうだ。
「温泉」は貴重な資源だと思うが、全国各地にあるにはある。
「海藻」も種類や多寡に違いはあれ、海があるところには何かしら生えている。
しかし、年間400万人もの観光客が訪れる温泉地に130種の海藻が生えている（そのうち10種以上は食べることができる）というところは希ではないか。
温泉と海藻という組み合わせが「新しい」と思う所以である。

【立教大学　安島博幸　名誉教授】

海藻の「温泉マーク」づくりは、なかなか良いデザインになったと思います。

３本の長さが違うところも芸が細かいですね。

インパクトもあります。うまく使って行けたらいいですね。

うまく使っていくには、このデザインだけではなくて、その背景や物語が 大事だと思います。モノの深い意味は、それに関係するストーリーや コンテクスト(文脈)があってこそ、感じられるものだと思います。

なぜ、鳥羽で「海藻による温泉マーク」なのか？

・豊かな鳥羽うみ文化の象徴的な要素としての「海藻」

・豊かな海の海藻を食べて育つから、美味しいアワビや魚

・健康的なイメージにつながる温泉と海藻

・美味しい海の幸と温泉を楽しむことができる場所としての鳥羽

などのストーリーとコンテクストを理解してもらうこと、さらに隠された 意味について、蘊蓄(うんちく)を傾けられるようにすると良いと思います。

○令和３年６月 21 日（月）毎日新聞に掲載されました。

温泉マークに鳥羽の魅力

「海の幸もセットで」

外国人住民の生活 映画に

来春上映へ

県内在住者と制作

三重

MIE

お中元贈り 絆を深めて

松阪市議選 期日前投票

混雑状況 ランプで確認

「感染リスク回避を」

山に暮らす職人

「木地師」の図録集完成

新型コロナ

◆お知らせ 2

お待たせしました。温泉振興会のホームページに「海女の愛ちゃんが湯く！」メールマガジンバックナンバーコーナーが出来ました。デザインの一部には 3 月下旬に採集した海藻を、野田三千代さんが押し葉にしたものを活用しています。重兵衛さんからスタートして 6 回目、懐かしいですね。

URL https://www.toba-onsen.com

◆お知らせ 3

現在取り組んでいる「鳥羽温泉郷　海藻 JAPAN プロジェクト」を更に連携強化（鳥羽市観光協会、鳥羽市、三重 TLO、じゃらん、財団法人　日本交通公社等）し、事業申請を行ったところ、令和 3 年 5 月 25 日付で観光庁より事業採択通知が届きました。

・公募事業名：地域の観光資源の磨き上げを通じた域内連携促進に向けた実証事業
・実施主体：一般社団法人鳥羽市観光協会（地域 DMO）
・事業名称：「海藻」で切り開く鳥羽の新たな滞在魅力創出プロジェクト
　～エシカル層をターゲットとした新しい学びの旅と歳時記を絡めた海藻料理の開発～
・支援対象経費の上限額（税込）：13,270 千円（全額国費）

◆お知らせ 4

6 月 13 日（日）「鳥羽温泉郷　海藻 JAPAN プロジェクト」の取組の一環として、市立海の博物館が主催するアマモ場造成活動を応援しました。
「藻場を増やそう! 魚たちの住む海の森作り　アマモの種を集めよう」に、当振興会の「ゆ～わく倶楽部」の世古部長らが参加しました。残念ながら私は参加できませんでしたが、四日市港管理組合や立命館大学等から 8 人が参加されたそうです。

・アマモ場を増やす取り組みとは（海の博物館 HP より）
海の博物館近くの大吉浦には、海草のコアマモとアマモがはえる「アマモ場」があります。現在伊勢湾内の「アマモ場」は 50 年前の 100 分の 1 にまで減少してしまいました。志摩半島や熊野灘沿岸では「ガラモ場」「アラメ場」「テングサ場」の減少、海底から海藻類が消えてゆく「磯焼け」が起こっているなど報告されています。そこで地元の漁協や海の博物館からなる浦村地区藻場保全活動組織では、鳥羽市、三重県、三重大学と協力して、「アマモの移植」「アマモの種の

採取」「アマモの種まき」などの参加を呼びかけ、多くの人々と「アマモ場」を増やす活動を続けています。

・参加したスタッフによると、講師の平賀館長の指導の下に以下の流れで進められたそうです。
①アマモの種を付けた「花穂（かすい）」部分を参加者に見てもらいます。
②ハサミを持って、アマモ場に入り「花穂」を付けた茎を切り取ります。
③切り取ったアマモの茎を網に入れます。
④集めた茎を船に乗せ、浦村漁協の桟橋に吊るしたコワリに入れます。
この日の作業はここまでで、約２時間でした。

・今後はコワリの中のアマモの種の選別や管理が行われ、11 月に種を海にまく作業が予定されているそうです。
　この日のアマモ場にはアオリイカの卵や珍しい海藻などもあり、参加者たちは充実した様子でしたとのことです。

②の作業：「ゆ～わく倶楽部」の世古部長（右側）

③の作業

アオリイカの卵

◆お知らせは以上となります。海藻プロジェクト前進しましたね。
　水無月の巻（上）（下）、最後までお読みいただき、ありがとうございました。